

『シン・別府学』Vol.4

中山昭則「どうした、そしてどうなる別府!!～戦後の発展～」

別府大学 国際経営学部教授の中山氏は、市制100周年の節目に別府市を見つめ直し、別府観光の発展とこれからについて考察する講座をおこないました。

別府市は1924年4月1日に別府市の市制が施行されました。この市制施行に至る前は1906年(明治39年)4月1日に、旧別府町と浜脇町が対等合併し、別府町が誕生します。そして市制施行後も1935年(昭和10年)、旧亀川町、石垣村、朝日村も別府市に編入し、今日の別府市になりました。

明治44年に別府駅が開設されましたが、大阪とは明治初期には航路が開設されていました。大正5年には木造棧橋が完成し、大型客船を受け入れることが可能となりました。また、大正天皇の視察にあわせて循環道路が整備されます。竹瓦温泉の改築や、松原公園の竣工がおこなわれたのもこの時代です。「こうしてみると、今日の別府観光の柱になっている施設や資源の開発は、市制施行とほぼ同時期におこなわれていた」と中山氏は述べます。

昭和3年には、市区改正や別府港の埋め立ての竣工など、今の中心市街地の街路の基盤となる大事業が実施されます。同時に観光都市別府も整備され、『ラクテンチ』など、今も別府観光の中心的な施設の開発が進みました。また、大阪毎日新聞と東京日日新聞が企画した「日本新八景」で温泉部門の1位に選ばれ、温泉観光地としての知名度を上げます。明治後期に開園した『海地獄』をはじめとする地獄地帯も観光地化され、油屋熊八が亀の井自動車を設立すると、全国初のバスガイドを起用した地獄めぐりバスの運行を始めます。これらの記録から、大正中頃から昭和初期に別府観光の原型がほぼ造られていたということがわかります。

ここから中山氏は「どうした別府」と題し、戦後の観光政策について解説しました。

1946年(昭和21年)の第90回帝国議会で、戦後復興の国策としての観光事業の活用が議論されました。翌年、第1回の国会で、観光都市についての計画が政府から表明され、別府では1950年(昭和25年)に「別府国際観光温泉文化都市建設法」が制定されました。その後、伊東市、熱海市、奈良市、京都市、松江市、明石市、松山市、長野市でも「文化都市建設関連法」が施行されたことから、中山氏は「別府は文化と観光を産業の柱とする政策の先駆的な都市だった」と述べました。

次に「どうなる別府」として、今後の別府観光について考察します。

中山氏は今後の課題として「温泉資源の永続性」を示します。京都大学によると、別府の温泉の温度は少しずつ下がっているそうです。「これが何を意味しているのかを安易に結論づけることはできませんが、いずれにしても温泉は自然資源であり、大切に使っていかなければならない」と中山氏はいいます。

さらに、温泉の活用法について、入浴以外の可能性も探る必要があるが、同時に軋轢を生まないように配慮すべきとも警告しました。また、別府に限らず少子高齢化が観光事業の未来をどう左右するかという点も考察すべきとつけ加えました。

続けて、中山氏は別府の強みを「温泉資源と知名度の高さ」であるとし、資源を守る努力を続けることと、国際的な発信の方法について考えるべきと述べました。なかでも国際的に発信する際の課題としては、「入浴における文化や習慣の違い」を挙げました。「外国人観光客の層も多様化しており、これからどう迎え入れるかというのも重要な論点になる」と述べ、発信の方法については諸外国の温泉地を参考にしていすべきと提言しました。

「別府は世界に類のない湯出量と泉質を有し、コロナ禍前には年間 800 万人の観光客が訪れていた人気観光地です。次の 100 年に向けて、これを国際的に発信していくスタートの年にしたい」と述べて講演を閉じました。